九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

明代後期、東南沿海地域の交易と海防 : 胡宗憲の倭寇対策と南澳島密貿易

夏, 歓

https://hdl.handle.net/2324/5068150

出版情報：Kyushu University, 2022, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

（様式６－２）

氏　　名	夏　歓
論　文　名	明代後期、東南沿海地域の交易と海防 ―胡宗憲の倭寇対策と南澳島密貿易―
論文調査委員	主　査　　九州大学　　准教授　　中島　楽章 副　査　　九州大学　　教授　　森平　雅彦 副　査　　九州大学　　教授　　静永　健 副　査　　九州大学　　准教授　　小林　亮介 副　査　　奈良大学　　准教授　　山崎　岳

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、明代後期の東南沿海地域における多民族的な海上交易の拡大と、それに対する明朝による海防政策と沿海地域統制の動向を、浙江・江南沿海における浙直総督胡宗憲の倭寇対策と、福建・広東境域の南澳島における交易と海防を中心に論じたものである。全体は序論・第一部（全三章）・第二部（全四章）・結論から構成される。

まず序論では、東アジア海域史をめぐる近年の代表的な研究成果を紹介するとともに、本論文の課題を提示している。第一部では浙直総督として倭寇対策を主導した胡宗憲に焦点をあて、16 世紀中期の浙江・江南における倭寇問題をめぐる政治動向を検討した。第一章では、胡宗憲の倭寇対策に関する、日本・韓国・欧米・中国における研究動向を整理・紹介する。第二章では、胡宗憲による唯一の奏議集でありながら、従来の研究ではほとんど利用されていなかった『三巡奏議』を主史料として、胡宗憲が前任浙直総督である張経の弾劾事件に関与し、朝廷の権臣と連携して倭寇対策の主導権を握っていく過程に検討を加えた。第三章では、『日本一鑑』の著者として知られる鄭舜功が、徽州商人の家系の出身で海外密貿易にも関与していたことを、近年中国の研究者が紹介した鄭氏一族の家譜や、関連する文集によって明らかにし、また浙江における互市公認をめぐる胡宗憲と鄭舜功の見解について、『日本一鑑』と胡宗憲の伝記を対照して考察している。

つづく第二部では、明代後期の福建・広東境域の南澳島における、海上交易と海防について論じる。第四章では、明代後期の南澳島と東アジア海域をめぐる研究動向を紹介するとともに、著者が国立国会図書館で確認した『南澳遊小記』の書誌と成立過程を考証する。同書は明末の南澳島に関する重要史料であるが、中国では散逸したと見なされ、従来の研究ではまったく利用されていない。第五章では、『南澳遊小記』などを活用して、16 世紀中期の南澳島海域において、東・南シナ海を結ぶ多民族的な密貿易が成長したことを明らかにし、附近の梅嶺半島には「公館」が設置され、地方当局が交易管理や徴税を行っていた可能性も指摘した。第六章では、16 世紀末～17 世紀初頭の南澳島が、福建・広東・台湾を結ぶ密貿易拠点となっていった過程を、海防図や航海誌なども活用して検証した。第七章では、17 世紀前期にオランダ人が台湾に進出する前後に、南澳島を密貿易や海賊活動の一拠点としていたことを、漢文史料とオランダ語史料の翻訳を併用して解明した。結論では、本論文における議論とその意義を総括している。

以上のように、本論文では胡宗憲の倭寇対策と南澳島の密貿易を中心として、明代後期の東南沿海における交易と海防の諸相を、各国語の研究成果を踏まえ、『南澳遊小記』などの新史料も活用して明らかにしており、東アジア海域史研究に新たな視座と知見を提供した業績として評価しうる。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与される十分な能力を持つ者であると認める。